

福井県における昨今の外来魚対策

鈴木聖子（福井県水産試験場 内水面総合センター）

漁場への外来魚の侵入

福井県で外来魚が確認されたのは、昭和 40 年代中頃、北潟湖でのブルーギルが最初である。オオクチバスは昭和 50 年代後半に広野ダム湖で確認された。コクチバスは最も新しく、平成 19 年に九頭竜湖で確認された。

漁場への現在の侵入は、オオクチバス 9 漁場、ブルーギル 7 漁場、コクチバス 2 漁場が報告されている。このうち漁業への影響が大きいと考えられる湖沼部で、重点的に対策が取られている。

三方湖の外来魚

景勝地の一つでもある三方五湖は、漁場としても重要な位置付けを持つ。淡水、汽水、海水の五つの湖が連結し、4 つの漁協が管理している。このうち淡水、汽水の 4 湖にオオクチバス、ブルーギルの生息が確認されている。特に淡水湖である三方湖では再生産が確認されており、外来魚駆除はこの湖を漁場とする鳥浜漁協が中心となって行っている。三方湖でオオクチバスが確認されたのは平成 12 年、ブルーギルは平成 21 年である。

オオクチバスとブルーギルの駆除

三方湖は、ウナギ、コイ、フナ、テナガエビ等を主要魚種としており、漁法としては柴漬け、延縄、筒、たたき網漁などがある。外来魚駆除のスケジュールは、漁業者による漁獲物からの分別駆除を中心に作られている。柴漬けではオオクチバス・ブルーギルの小型魚が、延縄ではブルーギルの大型魚が、たたき網ではオオクチバスの大型魚が混獲される。この他に伝統漁法であるぬくみ漁を復活し、外来魚駆除と同時に一般の人々への啓発にも取り組んでいる。

漁業者による駆除の限界

鳥浜漁協でも、漁業者の減少・高齢化は著しく、最盛期に比べると漁業生産量も減っている。このような中で、漁場を管理する漁業者だけでの外来魚駆除には限界がある。平成 18 年より、地元・若狭町が「外来魚駆除協力券」の制度を開始し、遊漁者等が釣り上げた外来魚を金券と交換している。この制度で報告されるオオクチバスの駆除数が、近年漁業者による駆除数を上回っている（平成 22 年度の報告数 796 尾に対して、漁業者による駆除数 292 尾）のが現状である。

これからの外来魚駆除は？

三方五湖は平成 17 年にラムサール条約の湿地登録を受け、地元を上げて環境保全活動が活発化している。外来魚駆除もこの一環として取り組まれているが、湖面での活動は漁業者が主体とならざるを得ない。外来魚駆除を継続していくために、一般の有志を取り込んでいくにはどのような手段が有効なのか、真剣に考える時期が来ている。